

解も終り、暖い春の訪れも近い或る日、日本への引揚げが始まるとの話が伝わってきました。大世界の一同で喜び、故郷の話に花も咲きました。命からがら逃げ延びて来た私達、此の地、そして皆との別れも胸の奥に、じんとするものがありました。数少ない荷物をまとも奉奉天迄歩き汽車の人となりました。落付いた処は錦洲でした。それより、コロ島に向い此の地で暫く共同生活をして五月二十日頃と思います。愈々上船と決り税関を通る時、コウモリ傘の柄の先のガラス玉を宝石と感違ひして取り上げ、其の上リユックサックの中味迄も取出しての検査でした。岸壁に日の丸の貨物船、是れで故国日本に、ほんとうに帰えられる。此の間の感激、一年間の苦闘の生活が、すうっと飛んで仕舞った様でした。誰ともなくサラバ。ハイラルよ、さらば満州よと段々と声が大きくなり、涙で岸壁もかすみました。佐世保港の灯が近くなり、日本に帰って来たのだ、感激丈でした。三十五年前の思い出に冷静になった現在、憾しい第二の故郷、今一度あの地を踏んでみたい、おそらく夢の中のハイラルではないでしょう。

## 北支那での思い出

静岡県 前田 美恵子

遠い外地での思い出は、あまりにも多すぎて何から先にと迷うようございます。あこがれと希望と不安とを一杯にして大陸に渡ったのは主人は十三年、私は十四年でございました。……

満州国に入ってから第一印象は想像以上に広い広い大陸の荒野でした。汽車は一途にその中を走りつづけていました。……

だんだん夕暮近くになった頃、左の方を見渡すと、はるかかあなたに地平線が一本あるだけで草も木もありませんでした。右の方を見渡すと、これも遠いあなたの地平線に夕陽が静かに並んでゆくのをみた時は！まるで絵の様に美しく、ミレイの晩鐘を！そのものを見た様で、ただ呆然とみとれておりました。その時の夕陽が忘れられない思い出の一つです。北京から張家口に向う途中、汽

車の中からの思い出は「万里の長城」でした。この、えんえんとした長いお城を築き上げたその陰には、どれほどの土民たちが生と死の中を交錯したかと思うと胸があつくになりました。途中「仙化」という駅で買った「柿」とぶどうのおいしかったこと。「おぢや」(若どりの塩蒸し)も温めてたべましたが中国人らしい、たべ物だったと思います。中国人は汽車の中で、よく食べ、お茶をのみ話し合いながら旅をしておりました。張家口での印象は貧富の差のひどかったこと。義務教育のなかったこと、苦しみに堪える力、生きぬく努力には全く驚くばかりでした。この頃日本人はあまりにも恵まれた、のんびりの生活でしたので……。北支の都である北京は美しい落ついたところでした。北京での印象は大きな城壁に囲まれた歴史ある古き都で京都の様な感じでした。特に現在の故宮は博物館にあるような豪華な寶石ばかりの掛軸、物置、立派な織物(ドレス、その他)など全く目をみはるような物ばかりでした。広大な敷地に立派な建物が数々あって、ぜいたくの限りをつくされた跡が残っておりま

す。「洋車」(人力車)がたくさんいて買物に便利でした。

天壇(寺院)に行った時は、晴れた秋の午後でした。きれいな二人のクニーヤン(娘)が裾の長い中国服を着て静かに歩いてゆく、その後姿がまるでシルエットをみているような美しさで今でも思い出すと行ってみたくありません。変わったところでは泥棒市があって、ぬすまれた物は、その市へ行くと売っているそうです。「万寿山」は立派な山と湖ですが、これも人工的に造られたのだからです。今頃(四月初め)になると北京のお花見を思い出します。さくらはありませんでした。あんずの花なのです。あんずの木の下でよく遊び、よく食べました。

石門に移ったのは戦争もはげしくなり内外ともに苦しくなってきた十九年七月でした。その頃、石門は暑さが極度にきびしく、子供(男子三人)たちは、まだ小さかったので病気になる、私も、そのため病院通いで共に苦しみ泣きました。その頃、主人は召集になったのです。が、体が弱かったので三か月で帰って来ました。正直のところ、ほっとしました。外地での淋しさ!心細さ!苦しさに、ずいぶん泣きました。

その後「終戦」引揚「元気で内地の土をふむまでは

と齒をくいしばって、がんばりました。死にそうな子供をおんぶして汽車の中、船の中と苦しみながら日本の土をふみました。日本の島がみえた時の喜びと叫び、それぞれの思いが願いが一になって上陸したのであります。戦争の苦しさ、悲しさを、しみじみ想いおこしております。

## 引揚者の一人として

山形県 羽柴 芳太郎

日本国の隆盛と大和民族永遠の繁栄を願う新国家を満州の地に創る事が当時の国是であり百万戸移民の表現に向け計画は着々と進行中であった。私も海外進出の夢を抱いていたのでチャンスがあればと時の到るを待っていた。

昭和十三年秋、満州第五次朝陽屯開拓団の小学校長青山永次郎先生が開拓地の現況報告を兼ねて青年学校生徒に講演をされました。その時、開拓地にも学校があり二

世教育には是非教員が必要である事を力説されました。これ希望する我が道と、勿論青山先生の要請もあり渡満の決意をしたのでした。当時、日本内地は分村分郷移民の気運も高まり、その先鞭をつけたような格好で翌年三月、当時担任していた高等科第二学年の晴れの卒業式も待たずに渡満したのでした。現地には住宅もあり生活物資も何一つ不自由なものはないというので、家族同伴（妻と娘）で赴任する事にした。

新潟の港では長兄が涙の見送りをしてくれました。

目的地東安省の朝陽屯に着いたのが三月十日頃（昭和十四年）、校舎は建築の真つ最中で生徒は二十人位、全員寄宿舎収容、校舎の完成まで半年間は二十四時間教育そのものでした。おねしょする子、夜泣きする一年生もあり、ランプの下で風を取り一緒に風呂にも入り背中も流したものです。重複式か単式授業の連続でした。青年学校も付設されるまでに成長してゆきました。東方ソ連国境の山々を四里の近くに眺めて暮らした六年間はまったく平穩無事そのものでした。

大戦も終りに近づき、昭和二十年三月第六次竜爪在満